

広告特集

漢字文化圏フォーラム実行委員会 (実行委員長・楠本正夫神奈川県日中友好協会会長) 主催の第二回漢字文化圏フォーラム「漢字文化圏の歴史と未来」が十一月二、三日の両日、横浜・磯子区の横浜プリンスホテルで開催された。漢字文化を共有する東アジア・儒教文化圏の歴史をたどるとともに、これらの諸地域が二十一世紀の世界の中でどう生きるべきかを探るのが狙いで、内外の学者二十五人に約五百人の一般参加者が加わり、熱心な議論が展開された。記念講演、分科会、全体会議で構成されたフォーラムの模様を改めて紹介する。

どう生きる21世紀の東アジア

第一分科会

漢字文化の変容と発展

必要な相互理解

専門家五人がそれぞれの立場から、「漢字文化」が東アジア圏でどのように変容し、将来どのように生きていくのかについて活発な議論が展開された。言語学者の鈴木孝夫氏は、「国民、学者を含め、日本語から漢字を追い出そうとする力の方が強い。例えば、自動車の名前はみんな横文字」と指摘する。高田時雄氏は、黄河流域に文字文明が出現して以降、漢字が周辺に広がっていく過程について言及。座長の中嶋嶺雄氏は、「漢字文化圏は、世界のGNPの三分の一を占める存在になるだろう。それだけに、世界に受け入れられる方向を指向すべきだ」と訴える。また、自文化中心主義的な中華思想から脱却すべきだと総括した。

基調講演

礼の思想と今後の課題

京都大学名誉教授 上山 春平氏



うえやま・しゅんぺい 1921年和歌山県生まれ。京都大学文学部哲学科卒。82年、京都大学人文科学研究所を経て、84年に同大名譽教授。著書は「歴史分析の方法」「弁証法の系譜」など。

「私は京都大学の人文科学研究所に入り、はじめは西洋部に所属し、西洋哲学を専門にやっていた。が、やがて東洋部グループで南宗の儒学者・朱熹

相互の共通性 違いの模索を

その中で、「天皇」とそれを支える制度を探った。「八世紀初頭、日本では律令制が確立し、以来、十九世紀後半まで千年以上もの間、政治制度として存続した。そこには『周礼』『儀礼』『礼記』以上『三礼』という」といった儒学思想

基調講演

旧ベトナムの儒教と現代ベトナムの儒教

ホーチミン市 歴史学会会長 チャン・バン・ザオ氏



チャン・バン・ザオ 1911年生まれ。反仏運動で強制送還され、十年間入獄。ハノイ大学、社会科学研究所の教授を歴任。ベトナム革命史、思想史など著書は多数。ベトナム・ホーチミン市在住。

刷新運動では 現実的障害に

刷新運動を促した。それはより優れた文明を享受することになった半面、ベトナムは民族的アイデンティティを失い、自己回復に長い時間を費やす原因ともなった」と冷静に指摘した。

「一九三八年に唐の内乱に乗じてベトナムは独立した。大王朝の季朝など歴代王朝は仏教を国教としたが、やがて中央集権化し、儒教を支配の道具とした」と、ベトナムと儒教のかかわりについて考証。「唐からの独立後、さらに約八百年間、儒教と科挙が統治体制の支柱となった」とも強調した。同時に、儒教に基づくかたくななまでの保守主義がフランスによるベトナムの植民地化を招き、国を滅ぼしてしまっという過去の歴史も紹介した。しかし、ベトナム解放運動に取り組んだホーチミンの思想背景については、「マルクス主義、民族主義、儒教のエッセンスの三要素で成り立っている」と分析する。トイモイ(刷新運動)にとっては、「儒教は現実的に乗り越えるべき障害になっている」とも述べた。



全体会議

21世紀には 人類共通の “物差し” を

フォーラム二日目の午後は、前半、後半に分けた全体会議が行われた。前半は、第一、第二分科会参加講師による「漢字文化圏の現状と課題」、後半は、「21世紀の漢字文化圏」をテーマに、第三、第四分科会参加講師が総括討議を行った。最後に、溝口雄三東大教授が、「かつては、すべてがヨーロッパの物差しで測られていた。私はこれに抵抗、アジアにはアジアの物差しがある」として研究生活を続けてきたが、二十一世紀には人類の物差しが必要。来年のフォーラムには、非アジア、ヨーロッパの人の参加も求めて、こうした課題を討議したい」とまとめた。